
童貞王

吉田淑子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童貞王

【Nコード】

N5066G

【作者名】

吉田淑子

【あらすじ】

箱根に療養に來た明智トモロウ探偵は、皮肉にもその療養地で今話題の殺人鬼「紫乙女」に遭遇してしまう。

明智探偵登場す

とかげというものはいったいいやらしい生き物です。目立つたためめめと光る体躯を持ち、そのくせ人を見るとサツと逃げる様子など、まるで地下に隠れ棲んで存分に派手に着飾っている、暗い趣味の人間の間ではありませんか。

その、とかげのような人間があるおそろしい、陰惨な事件を起こしたことを、私は今でもときどき思い出します。

有名な探偵の明智トモロウ氏は、日頃の疲れを癒すために、箱根で温泉三昧を決め込んでいた。ところが、朝は温泉、昼は温泉、夜も温泉の生活に、都会で慌だしく過ごしていたトモロウ氏は三日で飽きてしまった。滞在は半月と決めていたが、まだ精力あふれる年齢のトモロウ氏には、冬場の力エルのようにジツとしているというのが、とても難しい。

「美女でも引つ掛けたらどうです」

助手のコマワシ少年がそう言った。

「先生なら、すぐに付き合ってもらえますよ」

「ふむ。悪くない案だ。ここがこんなに田舎じゃなければね！」

声の大きいせいで、店の従業員にジロリと睨まれるのもお気になさらず、トモロウ氏は嘆息した。

「田舎、田舎って。妙齢の女性はみな美しいものです」

そういうコマワシ少年は、すでに片手にまるで小鳥のようなきれいな少女を抱いている。

「手が早いな、君は」

「えへへ、そういうわけなんで、あしたっから僕は、先生に付き合えません。ごめんあそばせ」

コマワシ少年はおどけてみせた。

どうしようもなく、トモロウ氏はトボトボと芦ノ湖あたりを散歩し

ていた。美しい景色も、やれやれ、一度だから感動できるものをこ
う何度も見せられては興ざめだ。ウロウロするうち、ふと男女二人
組を目に留めた。女は水色の巨大な帽子に水色のワンピースを着た、
色白の美少女だったが、隣の同年くらいの少年が忌々しい。

（なアんだ、男連れか）

そう思い、一瞥して通り過ぎようとする、

「……もし……あなた……」

と、少女のほうに声を掛けられた。

「なんでしょ」

「あなた、明智トモロウ探偵ではありません？ 新聞で拝見いたし
ました」

「いかにも」

「まあ、素敵。こんなところで出会えるなんて」

少女はその容姿から察したよりも幾分低い声で、それでも無邪気に
トモロウ氏との出会いを喜んだ。隣の少年も喜んでいるらしかった。
「僕もあなたのご活躍は小説で拝見しておりますよ。しかし、さい
きんに読んだ、『毒蛙』でしたっけ、あれはちつとも面白くなかつ
た。蛙の毒を使うにしたって、トリックがねえ……あれ、筆者がつ
まらん脚色を加えたんでしょう。あの作者、文面が大袈裟なもの。
僕はあまり上手いと思わない……」

少年は探偵小説が好きらしい。ペラペラと語られてトモロウ氏は戸
惑った。確かにOという人に、自分の活躍譚を書いても構わないと
言っているが、自分では目も通していないのだ。青年は今どき時代
おくれの書生の格好をした、坊ちゃん育ちらしい顔だちの優男だっ
た。

「克彦さん、あんまりいろいろ聞いたって良くないわ。探偵さん、
箱根にはいつまでいらっしゃるの」

「二週間ほどは」

「では、また会えますわね。わたくし、あのホテルに泊まっております」

彼女は湖のごく近くのホテルを指差した。

「わたくし、とても退屈してますの。もしも、探偵さんもお暇でしたら、活躍を聞かせてほしいわ」

「よろしい。お暇だったら伺いましょう。お名前は？」

「薺子、藤原薺子ですわ」

彼女、薺子は笑った。かれんな笑顔だと言いたいが、凶悪な事件を解決してきたトモロウ氏には、微かに毒を含んだような顔に見えた。とにかく、彼女がなにか、不自然なように思えたのだ。

「きつと、いらしてね……」

彼女はそう言つて、ホテルへ向かつて歩き出した。足場が悪いのを、ときどき青年が支えていた。

トモロウ氏の鋭い観察力が、二人は恋人ではないのではと思わせた。湖を背に去るふたりの姿は、恋人よりも主従に見えた。

「ふむ。あとで伺うか」

トモロウ氏は退屈していたので、何よりあの魅惑的な美少女が気になってしまったので、翌日さっそく例のホテルへと向かった。

「あの、藤原という者はこのホテルに……」

フロントに尋ねるまでもなく、「探偵さん」と例のハスキーボイスで呼ばれて振り返る。

「いらしてくださいっただのね。嬉しいわ」

「藤原さん」

「アラ、いやだ、よして……わたくし、名字で呼ばれるのはきらいよ」

薺子はそうやって、甘えるような口調で、「わたくしのことは薺子と」と言う。

「薺子ちゃんね」

「ええ、そうよ……探偵さん、よろしければ湖畔を散歩しません？ お話を伺いたいわ」

不思議な少女は、今日は淡い桃色のドレスだった。

「昨日の少年は？」

「克彦さんは、気分が悪いから今日はいけないわ」

「それは、看病はしなくていいのかい」

「いいのよ……いつものことだもの」

薺子はトモロウ氏の腕を掴んで外へと促した。外は快晴だった。ばかばかしいほど見晴らしも良い。見飽きた光景だが、薺子は無邪気に喜んだ。

「まあ、ご覧になって。富士山があんなにくつきり！」

「そうだね」

彼女といると、どうやら景色も新鮮に写る。しかしトモロウ氏には気になることがあった。

「きみはなぜ、こんな辺鄙な場所に來たんだい」

「まあ、探偵さんに質問されるなんて、わたくし犯人みたいね……」
「いいから」

「お金と暇があるんだもの。避暑に來ちゃいけない理由があつて？」

「あの青年とはどんな関係？」

「克彦さんは、わたくしの世話のたゝめに來てくれたのよ……わたくし、かわいい青年が好きだから、ホテルの年増女じゃ我慢できなかったの」

そう言つて薺子は笑つた。内容とうらはらの、屈託ない笑顔だった。それだけに、トモロウ氏はゾーツと背筋に悪寒を感じた。なぜか、薺子は白痴に思えた。これだけ美しくて、性的なものにまつたく無頓着なようなのは、どうにも少しおかしいのではないか。

「でも、先生のような紳士も好きよ……ねえ、お話をして頂戴」

まただ。また、彼女は巧みに甘えてくる。彼女ほど美しい女はそういないし、彼女ほどの確な甘え上手な女もそういない。まして少女と呼べる年齢で。

薺子は女でありすぎるように感じた。それは女を研究しつくして女以上に女らしくなる女形のような……

「ああ、それでは話そうか」

トモロウ氏の勘は少し騒いでいたが、これはいけないくせだと首を

ふった。まったく、事件でもないのに、ついつい人を観察してしま
う。職業病だな、とトモロウ氏は苦笑して、この不思議な美しい少
女とのデートを楽しむことにした。

湖畔の木陰で休みながら、トモロウ氏はご自慢の探偵譚を語った。

薔子はひたすら微笑んで相槌を打っていた。

「……まあ、すごいわ。それでは、先生に捕まえない犯人はい
ないわね」

「えへん、まあ、そのようになるかな」

「でも、はたしてこれからもそうであり続けるかしら。犯人が、魔
術師のような天才だったら……先生も敵わないかもしれせんわね」
薔子は件のハスキーボイスと微笑でもってそう言った。

「さあ、けれど、そんな人間はいないでしょうな」

「そう、人間でない生き物……つまり化け物ですわね。化け物相手
に勝てるかしら」

「ばかばかしい！」

トモロウ氏は笑って彼女の話を遮った。

「私の少ない経験からだが、人間というものは低俗だよ。まず、彼
らには生活がある。百年先の国の未来よりも明日の我が身の心配ば
かりしている。つまり、我が身の損になることはしないわけだ。犯
罪の天才——化け物がいるとすれば、まったく自分の利にならない
ことを、まったく無表情でやってのける奴のことだな」

「まあ、それでは、氣遣いが天才になってしまいます」

「実際そうだね。訳のわからない事件がいちばん恐ろしい。理由な
き犯行——恐ろしい！カネだオンナだと言われた方がずっとマシだ
ね。まあ、そんな理由なき犯行なんて事件はめったにあるものじゃ
ないさ。一見なんの理由もない通り魔のようなものにも、それらし
い理由はあるくらいだから」

「まあ、面白い」

薔子はコロコロと笑った。年頃の少女がこんな話を聞いておかしい
ものだろうか。やはり薔子は少し不思議な少女だった。

やがて、夕日が沈みかけたので、薺子と別れて、自分の泊まっているホテルへと帰る。明日もまた会えるだろうか――明日は少し遠くで、買い物でもしようか。呑気に温泉につきりながら、トモロウ氏はそう考えた。

助手のコマワシ少年が駆けてきたのはその時だった。

明智探偵の休日返上

「どうしたね。そんなに慌てて……僕はまっばだかだぞ」

「先生！ た、大変です！ 殺人事件です！」

「なに！」

トモロウ氏がいきおいで湯船から立ち上がった途端に、彼のものすごいイチモツが見えた。

「キャッ、ばけもの！」

「なにがばけものだ。状況を説明したまえ……いや」

トモロウ氏はまた湯船へと沈んでいった。

「今回は休暇で来てるんだった。断じて殺人事件の話など聞かないぞ。聞かないぞ」

「いいんですか」

「ああ、こんな田舎、容疑者も少なかる。警察でなんとかなる」

「でも、お友達の金田一ハウスケさんの事件はいつも田舎じゃないですか」

「彼は特殊だ。彼の言う田舎は箱根なんてもんじゃない。警察もほぼ機能していない」

「はあ、じゃあ僕はもう何も言いませんよ。本当に何も言いませんからね」

「けっこうだ」

「それでは、サヨナラ」

トモロウ氏が鮮やかに事件を解決することが何よりも好きなコマワシ少年がこんなにあっさり引き下がるのは不思議だったが、彼も余暇を楽しむという選択をしたのだらう、とトモロウ氏は鷹揚に構えて長風呂を楽しんだのだった。

トモロウ氏が脱衣所に謎のメモを見つけたのは上がってすぐだった。事件についての概要。と、いちばん上に書かれている。「何も言わないとは言いましたが、書くことは止められています」と、得意

気な奴の顔が浮かぶようだった。

「あいつは一休さんか！どれどれ……」

なんだかんだで職業病のトモロウ氏は、メモを読んでしまった。

——今朝早く、他殺と見られる死体が発見された。被害者：十八前後と見られる少年。死体の特徴と現場に残されたカードからして、いわゆる紫乙女の仕業である。

「紫乙女！」

その名前には聞き覚えがあった。現在、東京を騒がせているおそろしい変態殺人鬼！

被害者の男根を切り取ることが紫乙女のおぞましい特徴だった。現場に必ず紫乙女と書かれた薔薇のカードを落としていくことからこう呼ばれるが、当然性別などは不明の怪人である。

しかし、今回の紫乙女の凶行は、明智トモロウが箱根にしていると知つての事だろうか。だとすれば、『明智くん、君は捕まえられない犯人はいないと豪語していたね。さて、私はどうだろうか。今すぐ捕まえてみたまえ』という大胆不敵な挑戦状のようなものではないか。

「おのれ、紫乙女め！失礼千万！」

トモロウ氏は奮起して、サツとシャツを羽織り、現場へと向かったのだった。

「せんせーい、こっちですよ」

事件大好きのコマワシ少年はやはり先回りしていた。

「君ねえ、紫乙女なら先に言いたまえ」

「へへへ、びつくりしたでしょ。先生なら来ると思いましたよ。僕ですらかわいい彼女よりレディ・パールのほうが大事ですからね」
コマワシ少年はほつぺたを赤くしてにこにこしている。

「なにがレディなもんか。犯人は変態趣味のジジイに違いない」

「そうですね。僕は倒錯趣味の美婦人と見ますがね」

「がっかりするぞ。今にね」

トモロウ氏が肩をすくめると、不意に声が降ってきた。

「明智せんせい」

警視庁の轟警部であった。その名のとおり非常に轟く声をしている。「君か！はて君は東京にいたのではなかったのかね」

「それが」

轟警部はションボリと肩を落とした。

「紫乙女を逮捕できないからってこんな田舎に降格です。まあ、のんびりしてていいや、と思ってたら紫乙女が出張してきちゃってトホホ……岡山に飛ばされたらどうしょ。金田一さんとだけは組みたくないなア」

「君もつくづく運がないね」

がっかりの轟警部を慰めたあと、事件の概要を聞く。

「それがね、明智先生、じつは容疑者がいるんですよ」

「ほう！ 珍しく進展がありそうじゃないか！」

「そうなんです！ この辺をウロウロしてたってんでね、今事情を聞いていますよ」

警部が顎をしゃくった先には一人の少年がポツンと立っていた。少し離れたところには少女――

「薺子ちゃん！」

思わず声を上げる。あの、かれんな少女が現場に立っている！

「探偵さん」

よく見ると、容疑者の少年も以前薺子の隣にいた克彦だった。彼はやたら屈強な刑事に囲まれて目を白黒させている。

「探偵さん、わたくしたち、たまたま散歩に来たのよ。それだけよ

……」

薺子は弱々しかった。

「きみは少し黙っていなさいね。彼に聞いているんだから」

と、屈強な刑事のひとりが言った。それを横目で見て轟警部は続けた。

「何せ挙動不審でしてね……問い詰めたらあの通り、真っ青でしょ。ありゃあ何か隠してるんですよ」

長年の経験による勘ですよ、轟警部は言った。

「まさか、あの女の子は関係あるまいね。僕は昨日彼女とデートしたんだよ」

「はは、紫乙女があんな美少女だったら面白いが、残念ながら……あ、これは言ってなかったかな。どうやら紫乙女は男ですよ」

「ほう？なぜ」

「被害者以外の精子が見つかりましてね……つまり、犯人は変態の男」

「なんだあ」

コマワシ少年はつまらなそうに口を尖らせた。

「きゃあ！」

不意に高い声が響いた。薺子の声だった。彼女を振り返ると、克彦がよろめいて倒れる寸前だった。

「克彦さん！」

地面と仲良くする前に刑事に抱きとめられた彼の顔はすっかり生気を失っている。

「あらら……」

呑気な轟警部である。トモロウ氏は近寄って、彼の頬を叩いた。後ろで薺子が心配そうに両手を組み合わせて立っている。

「だから言ったのに。克彦さんは昨日から具合が悪かったのよ。拳動不審もそのせいなのに、あんまりひどいわ、ひどいわ、日本の警察はやくざよ、やくざ……」

さめざめ泣く薺子をそつなく慰めるコマワシ少年はさておき、克彦はトモロウ氏によってなんとか覚醒した。

「きみ、大丈夫かね。気分は」

「アノ……だ、大丈夫です……ぼく……」

「克彦さん！」

何か言おうとした克彦を遮るように叫んだのは薺子だった。

「帰りましょうよ。こんなところに居られないわ。ああいや」

「薺子ちゃん、彼はまだあまり良くないよ」

「パトカーを用意してるんでしょう。送ってつてくださらないの？」
「きみきみ、パトカーはタクシーじゃないからね」

「まあ、犯人扱いした上に病人を放っておくなんて、ひどい。本当にやくざそのものだわ」

あくまでもゆったりした言葉遣いで、それでもきちんと我を通すところに、彼女が大事に育てられたであろうことが知れた。呑気の轟警部はため息をついて、刑事のひとりに「君、送ってやりたまえ」と告げた。

「しかし、君、嫌疑が晴れたわけじゃないからね。気分が良くなったらまた話を聞くからそのつもりで」

「僕は……」

克彦がようやく、という様子で口を開いた。

「僕は、犯人じゃありません」

まっすぐな目は、しかし不安げにすぐ逸らされ、彼はすぐ側のトモロウ氏を見た。

「探偵さん、助けて……僕が必ず、犯人でないことを、どうかどうか、知ってください」

彼の両の目から、熱い涙が湧きでた。手はふるえて、トモロウ氏の裾を掴んでいる。心からの懇願の仕草だった。トモロウ氏にはその様子がいじらしく、またかわいらしく感じられた。

「うむ、きみ、万事任せなさい」

手を取ってやると、安心したように彼は目を閉じた。顔色はいよいよ蒼白だった。彼は確かに怯えているようだった。いったい何に……？ なんとか支えてやって、蕎子と克彦はパトカーに乗り込んだ。トモロウ氏はそれを見送りながら、ひとり思案に暮れていた。そこに轟警部が声を掛ける。

「いやあ、まいった。どうやら彼も、犯人の線は薄いすな」

「そうだな。幼気すら残る少年じゃないか」

轟警部は太い首をボキボキ鳴らした。彼のくせだった。

「ま、一応血液検査で以前見つかった精子と照合して、ハイおわり

……でしような」

「でも、あやしいですよ。パトカーまで出させるってことは、ここからわりと遠いところに住んでるんですよ。もしかしたらホテルかもしれないけど。病人がわざわざ、こんなとこまで来るもんですかね」

コマワシ少年が言った。

「ふーむ、しかし、人間の行動なんて、本当に予測できないからね」
「先生は美少女や美少年に弱いからたまらないや」

コマワシ少年は呆れ顔である。

明智探偵推理する

その晩、トモロウ氏の泊まるホテルへ電話が掛かってきた。誰かね、尋ねると、「僕です……今日お世話になりました、克彦です」細い声が返ってきた。

「きみか。どうだね、具合は……」

「ええ、すっかり良い具合です。ご心配をおかけしました」

声こそ小さいが、陰気は感じられず、具合は本当に良くなったのだらうとトモロウ氏は察した。

「それは何よりだ。では」

「待つてください、あの、……」

克彦は一瞬ためらい、しかしすぐにこう言った。

「……お話したいことがあります。ですが、その……」

「電話では話しづらい？」

「ええ……直接お会いしたい。あなたに」

あなたに、という言葉をつとめて強く発して、彼は時間と場所を告げた。

「ええ——ええ、必ずいらしてください。僕はもう、あなたしか頼る人がいない、継る人がいないのです。お願いです……」

「落ち着きなさい。きつと行くからね」

受話器の向こうから溜め息が漏れた。必ず、必ずです。と念を押して、克彦は電話を切った。ツー、ツー、という音を聞き受話器を置き、トモロウ氏はその灰色の脳細胞を動かした。

——彼はいつたい、何に怯えているのだろうか？

具合が悪いのは昨日からだ、蕎子から聞いている。そんな病人がなぜ滞在先のホテルから離れた殺害現場に？また、なぜ蕎子も一緒だった？なぜ——

「先生！」

取り留めない思考に身を委ねていたのを引き戻したのは助手の声だ

った。

「どちらの女性ですか？」

「残念ながら男だ」

「男！」

「例の——今日の容疑者の少年だ」

「ははあ！あの美少年！」

コマワシ少年は納得したように頷いた。

「先生はさすがです。女も男も来るもの拒まず。僕も見習わなくっちゃ」

「きみねえ……」

トモロウ氏はあきれて後頭部をバリバリかいた。

「僕アまだまだ男はダメだなあ。いやしかし、薺子ちゃんはきれいだった。きゃしゃで、色も抜けるように白くって」

「まるで日本人形のようなね彼女は……チョット東京でもお目にかれない美形だ」

「いやあ、僕は一度だけあのくらいきれいな人を見たことがありますぜ」

「ほう、それは誰だい。ぜひ伺いたいな」

するとコマワシ少年は得意気に、それではお教えしましょう、と氣取った。エヘン、と咳払い。

「三代目夢之介ですよ。僕ア芝居が好きでしてね」

「なんだ、女形じゃないか」

「いえね、實際きれいなもんですよ。女より女らしいんだもんなあ」
何気ないその言葉にトモロウ氏はハツとした。

「女より、女よりね……」

□ □ □ □

一方、こちらは薺子と克彦の部屋である。

「克彦さん、どちらに行つてらしたの」

「いえ、少しはばかりが長くなっただけです」

「まあ！ほほ……それは失礼」

薔子は笑ってベッドに腰掛けた。

「ご機嫌ですね、薔子さん」

「ええ、そうね。ふふ、楽しい。わたくしは——紫乙女は決して捕まらない……あの探偵さんが悔しがる様が目に浮かぶようだわ」

ああ、なんとこの事だ！この美少女が紫乙女！なんと大胆不敵！なんとふてぶてしい！犯人は堂々と探偵の前に姿を現していたのだ！

「ああ、なんだか暑い……克彦さん」

「水を、飲みますか」

「ええ、それと、わかつているでしょう？」

薔子が微笑むと、克彦は目を逸らした。薔子の笑顔が——計算し尽くされたこの美しい笑顔が克彦は嫌いだった。笑顔は、造形として美しくないモチーフだ。しかし、だからこそ心根の誠実さが見えて好ましく思えるのに、この笑顔ときたら誠実さの欠片もない。

水の代わりに葡萄酒を傾けて、薔子は顔色を変える様子もない。克彦は冷たい水を飲み干して、薔子のブラウスに手を掛けた。「よくわかつているのね」薔子は囁いて、克彦の頭を撫でてやる。あらわれた薔子の胸に乳房は見当たらなかった。薔子は女性ではないのだ！冷水をのんだ冷たい克彦の舌が薔子の首筋をなぞる。薔子は顔色も変わらない。ただ、「冷たくて気持ちがいい」とだけ言って目を閉じた。

「薔子さん、明智探偵は気に入りましたか」

「ぜんぜん」

薔子はかぶりを振った。

「だめね……まるで俗人よ。組織に属さない探偵なら、あるいは素敵かしらと思っただけで、あの人は美しくない。ためらいなく打ちのめせるというものだけだね……」

聞きながら、克彦は薔子のスカートにも手を掛けた。その顔は欲情とは程遠い、親に叱られまいとする子供のようだった。

「今日はよしでしょうよ……せつかく冷えたのにまた暑くなるわ」
克彦は何も言わず、ただ息を吐いて、薔子にブラウスを着せた。その手がガタガタふるえている。「なにを怖がるの?」「いえ」薔子はブラウスの釦を上まできちんと留めてもらうまで何も言わなかった。手伝いすらもなかった。そしてすべてが留まるのを待って、吐き出すように呟いた。

「女はまもの」

蝋燭の火が揺れる。

「女は少年を男にする魔物。童貞こそがいちばん美しい」

「ええ、ええ知っています」

「わたくしは嬰兒の頃に母を失い、ついぞ女の乳房に抱かれなかった。まったく女に触れていない清らのからだ……わたくしこそ童貞の中の王なのよ」

薔子の青白い肌を、月が余計に青く見せていた。薔子は花瓶の薔薇の花を掴んで投げた。紅い花びらが散る。

花びらが落ち切る前に、薔子は命令のように言った。

「その野暮ったい服を脱ぎなさいな」

「あ……いえ、僕は……」

「いえ? アラマア、おかしいのねえ……わたくしに逆らう……おかしいのねえ……」

薔子が笑う間、克彦はただふるえていた。

「あなた、薔薇は好き? お好きよねえ。わたくし克彦さんのために良いものを作ったのよ」

薔子を取り出したのは、薔薇の棘を模した鞭だった。

「ひっ!」

思わずよろめいた克彦の髪を薔子が掴んだ。

「選びなさい。わたくしを打つか、わたくしに打たれるか。さあ、早く!」

「そんな、僕は……」

「ほほ……優しいのね克彦さん、かわいいのね……では、わたくし

が決めてあげる」

蕎子は掴んだ手を緩めて言った。克彦には月の逆光のせいで蕎子が影のような不気味な化け物に見えた。

「わたくしをぶちなさいな。そうしたら、不寐もすべて許してあげてよ……」

克彦は、自分の血の気が引く音を聞いた気がした。

明智探偵の名推理

翌日、トモロウ氏は克彦が指定した湖畔へと向かった。はたして克彦はそこに立っていた。

「きみ！」

声を掛けると、克彦はハツとして振り向いた。

「あ……探偵さん」

「どうしたね。前よりも顔色が悪いじゃないか。ぶり返したのか。声もかすれている」

「いえ、平気です……」

「あちらに座りなさい、ここは日差しが強い」
木陰を指差してトモロウ氏は克彦を促した。

「さて、きみはいつたい何の用で僕を呼んだ」

克彦はうつむき、やがて意を決したように面を上げた。

「僕には時間がないので、結論から申し上げます。僕は殺されます。あのおそろしい人に殺されます。助けて……」

「薔子ちゃんか」

「ええ……ええ！やはり探偵さんには分かるのですね、あの人のおそろしさが……」

克彦はただただあなたばかりが頼りだ、と、熱い瞳で繰り返した。

「あの人は僕に暴力を振ります。ほら……」

克彦が着物をくつろげると、鎖骨あたりに薔薇のような痣が見えた。

「これは！」

「鞭です。昨日のは酷かった。先端に棘のボールがついていて……だから、痣が薔薇みたいになる」

着物の下の白い肌に浮かぶ紅い痣に一瞬目を奪われ、トモロウ氏はかぶりを振った。

「探偵さん……どうか、どうか助けてください！僕は弱味を握られ

ているんです、助けて……」

痣を隠そうともせず、克彦はトモロウ氏にしがみついた。途端に、彼は何かを見つけてトモロウ氏の腕の中でビクリとふるえた。

視線の先には、件の紫乙女——薺子は例の笑顔だった。

「薺子さん……」

克彦は慌ててトモロウ氏から離れた。薺子が立っている。薺子は何も言わずに笑っている。

「あ、あ……僕、もう行きます。薺子さん、どうなすったんです、こんなところで……」

薺子は何も言わずに踵を返した。克彦はそれを追う。トモロウ氏はそれを目で追いかけていた。

□□□□□

「血液検査の結果は？」

トモロウ氏が轟警部に電話で尋ねたのは二日後だった。

「ああ、そうですが、やはり例の少年は犯人じゃないですな。調査の結果、紫乙女はA型、彼はB型のようにしてね。捜査は振り出しますよ」

当時の技術では血液型以上のことはわからないのだった。

「ふむ。けっこうだ。それで、少女のほうは血液を採取したのかい」

「はっはっは。まさか。少女から精液は出ませんよ」

「では、取っていないんだね。よろしい。彼女を呼んでくれないか。少年と一緒にね」

「あ……明智さん、まさか……」

「結論はその場でお話しよう」

「ひゃあ……えらいこった……」

轟警部はその狼狽とは裏腹の迅速な働きを見せた。その日のうちにすべてセッティングは出来てしまったのだ。

□□□□

はたして、犯人の薔子は白々しくもやってきた。

「探偵さん、犯人が見つかったそうですわね。わたくし、不謹慎にもわくわくしてしまいます」

「ああ、すぐにお目にかきましょう」。

「まあ、わたくしがいても良いのかしら」

「結構ですよ。いらっしやい」

薔子はたくさん薔薇がついた帽子をかぶり、いつもの微笑をたたえ、まったく自分に疑いの目が向いているとは気付いていない様子であった。この美しい怪人はトモロウ氏によって、容易に捕らわれてしまうのだろうか？

「探偵さん……」

克彦が切なげに声を漏らした。トモロウ氏の謎解きが始まった。

「……そもそも、紫乙女とは男です。男！つまり人類の半分は嫌疑を免れるわけですな」

「ふむふむ。そりや間違いない」

轟警部が大袈裟に相槌をうつ。

「ところがこの世には、目立つくせにすぐ隠れてしまうトカゲのように不思議な生き物がいるものです。目立つような美しい男、そう、男が女を演じているとしたら、彼はたちまち嫌疑の外となるわけです」

克彦はハッとふるえあがり、薔子はさすがに眉一つ動かさない。

「あ、明智先生、まさか……」

「彼女の血液型を調べてみなさい」

「マア……」

薔子はここまで来て変わらない。あくまでのんびりとお嬢様を演じている。

「ひどいわ、ひどいわ、あんまりよ、どうして？」

「きみは女優だね。いや、俳優か……とにかくね、素晴らしい演技

だ。だが」

トモロウ氏は薺子の首筋を指差した。「ほくろが消えているよ」
薺子は首筋を押さえた。

「探偵としての僕を、きみは随分侮っていたようだね。……きみも」
トモロウ氏は克彦を見た。克彦は表情もなく視線を返した。そこに
怯えの色は無かった。

「きみも大した千両役者だ。危うく騙されかけた。轟くん、彼らを
見て何かに気付かないかね」

「はあ、なにか……」

ぼんやりの轟警部が近眼を凝らしてふたりを見る。「……顔が似て
いますな」彼らの白い面は良く見ると双子のように似通っていた。

「その通り。彼らは非常に似ている。巧みな化粧と特徴的な服装で
ごまかしてはいるがね」

「つまり……」

コマワシ少年が息をのんだ。

「ふたりは時々入れ替わっていたということだ。時には女に、時には男に……そして正体は二人とも少年だ。僕は克彦くん二度触れたが——一度目は彼が倒れたとき、二度目は彼に呼び出されたとき——一度目も二度目も確かに少年だったが、まったくほくろの位置が違っていた」

「いやだ……ゴジョウダンおっしゃるのね……」

トモロウ氏はおもむろに薺子に近付き、その服を破り捨てた。そこには少年らしい面白い胸板！その体に走る無数の鞭傷！

「わわ……」声をあげる一同。

「ほほほ、探偵さん、わたくしのまけ、まけね……大したものだね。克彦さんがぐるだというのもご存じだったのね……わたくしだけでなく克彦さんにも夢中にさせてあげようとしたのに」

「あいにく僕には幼年を愛でる趣味はなくてね」

「わたくしもあなたが嫌いよ。良かったわ、趣味が一致して」

「な、何をしているか！捕まえろ！」

轟警部が目を覚ましたように周りの部下に命令する。

「あら！あれは何かしら？」

薔子の言葉に振り向くと、なんとバラバラと音を立てて巨大なヘリコプターがこちらに向かってくるではないか！

「皆さん、お別れね、また会いましょう……最も、次に会うときはわたくしはまったく違う顔の違う名前でしょうけど！」

「待て、紫乙女！」

慣れた様子で縄梯子に捕まり、薔子は手を伸ばした。「克彦さん」

「きみは行っちゃならない！あんな悪魔のところに行っちゃならない！」

克彦は逡巡する様子で、それでも意を決したように薔子の手を取った。

「きみはいつたいどうして……」

「僕はもういけません。薔子さんに囚われている……」

一人の警官が勇敢にも縄梯子をよじ登ろうとしたが、あまりに危険な芸当だったのですぐに降りてしまった。不思議なのはこんな軽業を平気でやってのける紫乙女とその従者！紫乙女の高笑いだけが空にこだましていた。

「明智さん……」

「ああ、くそつ、逃がしやがった！」

探偵らしくもなく毒づいて、トモロウ氏は頭をかいいた。

「なーに、楽しみを延ばしただけです。次は捕まえましょう！」

明るいコマワシ少年であった。

世の中の人々はしばらくこの話に夢中になり、彼が紫乙女、いや、彼女こそがという問答が絶えなかったそうである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066g/>

童貞王

2010年10月9日01時11分発行